

コロナ禍対応で複数設置した無人のタッチダウンオフィスを ビデオ監視システムで遠隔地から効率的に運用・管理

無人化の進むオフィスを遠隔地からいかに運用・管理し、セキュリティを担保するか。今、コロナ禍によるテレワークの普及で多くの企業が抱える課題だ。管理者が不在でも安全に、継続的に運用できることや、拠点を巡回せずに機器のメンテナンス等を行えること、複数拠点の膨大な監視カメラ映像を一元管理できることなど、要件は多岐にわたる。それらすべてを満たしたビデオ監視システム「Genetec Security Center Omnicast」の活用事例を紹介する。

高いセキュリティが求められる中 無人化・省人化の進むオフィス

コロナ禍によるテレワークの普及にともない、オフィスの無人化・省人化が急速に進んでいる。その結果企業は、人のいないオフィスのセキュリティをいかに担保するか、遠隔地からどのようにして運用・管理するかという、新たな課題を抱えることになった。

もとより昨年、企業のセキュリティに対しては、社会から厳しい目が向けられている。セキュリティ対策の不備により、企業の管理する個人情報や監視カメラ映像などが流出するといった事案はあつと絶えず、そのつど当該企業は大きな批判にさらされてきた。さらに、ブランドイメージを著しく傷つけるような事件ともなれば、株価の下落や従業員に対する攻撃など、より直接的かつ甚大な損害を被る事態にまで発展しかねない。それが現代社会の実情だ。

世界トップレベルの治安のよさを誇ってきた日本において、多くの企業が長年、いわば性善説にもとづいてオフィスを運営・管理し、セキュリティ対策にさほど関心を払ってこなかったのは当然かもしれない。しかし、サイバーセキュリティにせよ、フィジカルセキュリティにせよ、セキュリティ対策に関する世界的な潮流はゼロトラスト、「なにものをも信頼しない」という考え方がスタンダードとなりつつある。

セキュリティ対策は、普段、企業に直接的な収益をもたらすものではない。しかし、企業に対する社会からの評価の厳格化傾向、さらにはコロナ禍によるオフィスの無人化・省人化の進行という近年の情勢を踏まえれば、日本企業もゼロトラストを採用し、セキュリティ対策への投資を改めて検討すべき段階を迎えているといえる。

本稿で紹介するのは、そうした状況において無人の「タッチダウンオフィス」を複数立ち上げ、Genetecのビデオ監視システム「Genetec Security Center Omnicast」を導入した企業の実例だ。その取り組みにおいて「Genetec Security Center Omnicast」はどのような役割を果たし、なにを可能にしたのか？

無人のタッチダウンオフィスを 遠隔地からいかにして守るか

ネットワークシステムズは、世界の最先端技術を取り入れた情報インフラの構築とその関連サービスの提供、および戦略的なICT活用を実現するノウハウの提供を事業の柱とする、大手ネットワークインテグレーターだ。1988年設立の同社は、機器のネットワークやシステムの構築などをメインにビジネスを開始したが、その後、ICTの利活用を通じて顧客の経営課題を解決するといった上流の工程にまで事業領域を拡大し、右肩上がり成長を続けてきた。

そんな同社にとっても、コロナ禍は大きな転機となった。2009年から補助的な業務形態としてテレワークを推進してきた同社だが、新型コロナウイルス感染拡大の第2波を受け、2020年10月、全社でテレワークを主体とする業務形態へ転換する方針を打ち出したのだ。

その中で同社は、テレワークでは非効率な業務を補完するための設備、あるいは顧客訪問の際などに立ち寄れる施設という位置づけで、管理者が常駐しないタッチダウンオフィスの設置を決定した。そこで浮上したのが、日常的に無人の状態となるタッチダウンオフィスをいかに運用・管理し、セキュリティを担保するか、という問題だ。

社内のファシリティ設備を管理する部門である同社総務部 ファシリティチームの谷口氏は、ファシリティ設備と再先端のICTソリューションを融合し、その利活用のノウハウを社内に展開することも業務目的のひとつとしている。谷口氏はその立場から、タッチダウンオフィスに導入するセキュリティシステムについて検討を重ね、以下の要件を挙げた。

「まず、拠点側に管理者がいなくても継続的に動かせることです。拠点内に専用のサーバなどの機器を設置すると、従業員が定期的に巡回してメンテナンスしなければならなくなるので、拠点内に装置を置かなくていいことが必要条件となります。また、当初から複数の拠点をどんどん立ち上げていくことは決まっていたので、ひとつの管理画面でそれらすべてを把握し、共通の操作方法で運用できる

ことも重要だと考えました。複数の拠点それぞれで操作方法が異なったり、データが別々のところに保存されていたりすると、運用が非常に煩雑になると思ったからです。そしてもうひとつ、拠点が増えたり、新たな活用や他のシステムとの連携が必要になったりしたとき、柔軟に対応できるシステムであることも重視しました」(谷口氏)

そうした要件をすべて満たすものとして選ばれたのが、グローバルトップのセキュリティソフトウェアベンダーGenetecが提供するビデオ監視システム「Genetec Security Center Omnicast」だった。

運用効率、データ通信の機密性、 プラットフォームとしての 発展性を評価

同社ビジネス開発本部の佐々木藏徳氏は、フィジカルセキュリティ関連商材の展開およびマーケティングの担当者として、設計時に相談を受け、製品の選定に携わった。さまざまな製品を比較検討し、「Genetec Security Center Omnicast」を選んだ理由について、佐々木氏はこう話す。

「『Genetec Security Center Omnicast』は、クラウドや仮想化基盤に対応していることを特長のひとつとしています。そのため、弊社の社内システムで用いている仮想化基盤上にデータ保存用サーバをインストールすることで、拠点側にはサーバを置かず、カメラ本体を設置するだけでいい。これなら、拠点を巡回して機器をメンテナンスするというオペレーションが発生せず、テレワークでも運用を完結できます」(佐々木氏)

拠点外にデータ保存用サーバを置くというのは、同社では初の試みであり、データ通信の機密性には特に留意した、と佐々木氏はいう。

「クライアントとサーバ間のデータ通信が暗号化処理されていない製品は意外に多く、そういうものだと思っていながら、簡単に覗いてしまうので、フィジカルセキュリティ環境は特に攻撃目標になりやすい。その点『Genetec Security Center Omnicast』は、通信系・制御系の通信がすべて暗号化処理され、

まったく傍受できないという特性を持っているので、セキュリティをしっかり担保できます」(佐々木氏)

続けて佐々木氏は、柔軟性・拡張性の高さも「Genetec Security Center Omnicast」を評価したポイントのひとつだった、と語る。

「拠点が増えたときに容易に拡張できるのももちろん、たとえば将来、オフィス内の従業員の人数をカウントして混雑状況を可視化したい、密を検知したいといった別種の要望が出てきたとき、メーカーに依存せず、さまざまなソリューションと連携させてそれを実現できる柔軟性があります。フィジカルセキュリティに限らず、社会やビジネスの変化に応じて活用範囲を広げられる、プラットフォームとして発展性があるというのは、決裁権者を説得する上でも非常に重要なポイントとなりました」(佐々木氏)

単なる

フィジカルセキュリティでない、“夢”の詰まった製品

そうして「Genetec Security Center Omnicast」の採用を決定した同社。その構築作業において特筆すべきは、セットアップからユーザーに対するレクチャーまで、監視カメラの取り付け工事以外のほとんどの作業をリモートで完了できたことだ。

「一般的なシステムを構築する場合、やはり現地へ行って機器の設定などを行い、さらに現地にユーザーを呼んで使い方を説明しなければなりません。それに対して「Genetec Security Center Omnicast」は、仮想化基盤上に構築されているので、セットアップなどを遠隔で行うことができ、使い方もリモートで説明した上で、各ユーザーが自分の端末から確認できます。実際私も、セットアップ作業を在宅で完結することができました」(佐々木氏)

すべてを遠隔で行える点は、運用においてさらに強力なメリットとして威力を発揮している、と谷口氏は強調する。

「Web ブラウザベースの管理画面から、複数の拠点の各監視カメラの映像を一元的に確認することができます。たとえば、なにかが壊れていたとか、なにかがなくなったとかいった問い合わせがあったとき、録画サーバに蓄積されている映像を検索して確認します。基本的な運用はそれだけで、録画映像の定期的な確認作業は行っていません。有事と有事の間の期間が長くても、検索して必要な場面をすぐに確認できるので、このような運用方法が可能になる。やはりそこが業務の効率化にもっとも貢献しているポイントですね」(谷口氏)

谷口氏によれば、専用のアプリケーションではなく、一般的なWeb ブラウザを使える点



谷口 勇 氏

ネットワークシステムズ株式会社
総務部
ファンリテイチーム
マネージャー



佐々木藏徳 氏

ネットワークシステムズ株式会社
ビジネス開発本部
フィールドマーケティング部第3チーム
エキスパート

も、管理者側にとって大きなメリットとなっているようだ。

「有事の際にしか使わないシステムなので、専用のアプリケーションを利用する従来型のものだと、操作方法を忘れていたりして、使う都度、手順書を確認し、かなりの時間を浪費してしまいます。その点、「Genetec Security Center Omnicast」はWeb ブラウザベースなので、感覚的に操作でき、バージョンの更新なども簡単。スピード感を持って運用できています」(谷口氏)

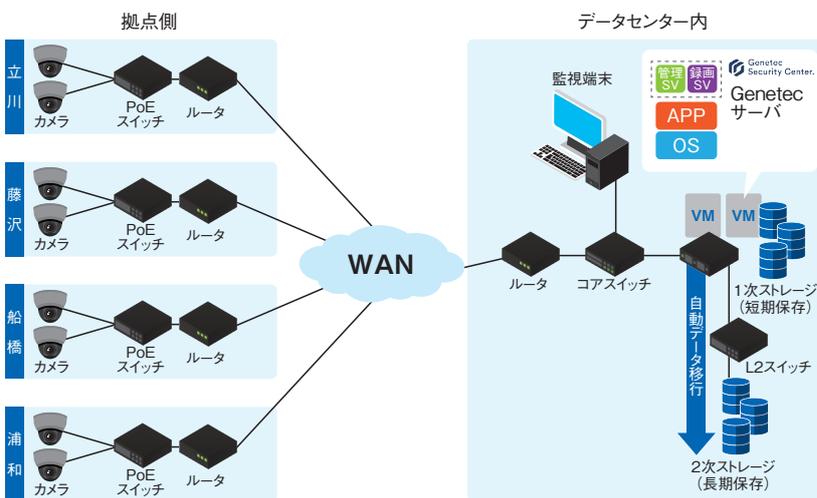
導入前の想定と比較して実際の運用負荷はどうだったか、と尋ねたところ、「圧倒的に楽ですよ、本当に！」と即答した谷口氏。2021年10月現在、同社のタッチダウンオフィスは4か所、今後さらに増えてもまったく問題ない、と話す。

「普通なら、拠点を増やすほど管理者にとっては確認すべきものが増えていくわけです。しかし、「Genetec Security Center Omnicast」は、ひとつの画面から見たいところだけをすぐに確認できます。今後、使用状況をみながら、タッチダウンオフィスを順次増やしていく予定ですが、「運用がまた大変になるな」というような後ろ向きな気持ちにはまったくなりません。むしろ、別のシステムとつなげられることで、防犯だけでなく、さらに広い目的に活用できるシステムへと成長させられそうだ、という期待が膨らんでいます」(谷口氏)

佐々木氏も同様の期待を抱いているようだ。

「『Genetec Security Center Omnicast』を含む『Genetec Security Center』という製品は、単なるフィジカルセキュリティシステムではなく、多様なシステムに対応し、さまざまなソリューションをつなげるハブとなり得るプラットフォームです。そういう“夢”の詰まった製品なので、今後、活用の場をどんどん広げていきたいですね」(佐々木氏)

システム構成図



問い合わせ先



ネットワークシステムズ株式会社 <https://www.netone-pa.co.jp/>

本社 〒100-7026 東京都千代田区丸の内 2-7-2 JP タワー

西日本オフィス 〒532-0003 大阪市淀川区宮原 3-5-36 新大阪トラストタワー